

各地よりのたより

瀬戸便り (十月)

月始めは、まだ盛りだけれど、月末には、もう虫の聲はさびれる。十月は良い時節だ。柿だつて色づくし、松茸の香りだつて存分にたのしめる。日中は暑くなく、寒くなくて、よろしいが、でも夜の観測は少し寒くなつて来た。

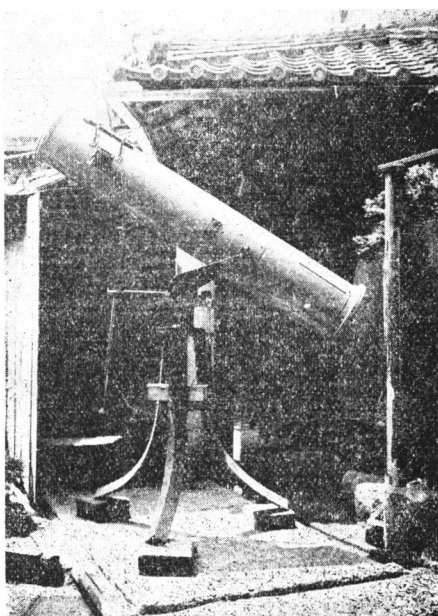
2日と3日は雨だつた。でも3日の夕方には雨も上つたので、明朝は一時頃に起きることに決めた。先づ對日照を見ること、それから夜明け前の黄道光をまつ間、東天の彗星搜索をやること。望遠鏡の筒の上に、しつとりと夜露が下りる。之では露除けに、何か作つてやらなければなるまい。手細工の木の筒ではいたむだらう。微動装置が一つもないので、とんでもないときに、星がづれたり、又、動かなくなつたりして呉れる。でも木造鏡の星の像の美しさは、無類である！

3時50分近く、東天獅子座の大鎌の近くで、一つの星霧状のものをひつかけた。非常に柔かい光りである。先に、カニンガム彗星(1940c)を見たときの事を思つてみた。そしてあの星には、やゝ鋭い核のあつたことを思ひ出したが、今のこの星には、それは見えない。

スケチを取ることにする。4時20分又、望遠鏡を元の所にかへしてみた。“オヤ、動くんじゃないか？”少し動いてゐるらしいのである。4時40分、又見た。動くのである。“彗星！ そうだらうか？ いやまて、あわてゝはゐけない。まで空は暗い。倉敷の大望遠鏡で見てもらふのだ。”山を夢中でかけ下り、村役場の暗い電話室にとびこんだ。——そして、それは岡林氏のすでに1日の暁に発見せられて居るのを知つたのである。

先に新星、そして彗星、輝く岡林氏の偉勳、我等は我等の岡林氏の存在を何よりも大きい誇りとしたい。

(本田)



東京・阿部正明氏の269ミリ反射望遠鏡